

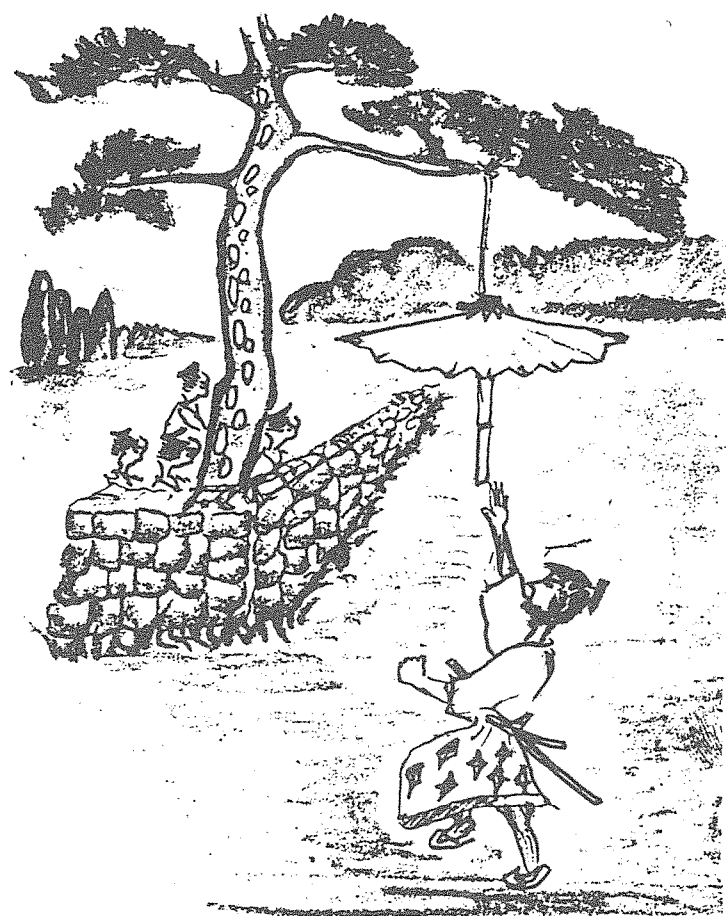
晩翠舎の松の大木に

鍋のふた下がる

宮田 石丸 恵 守

宮田の三好退蔵さんの、広大な屋敷には、小学校を卒業した、男子の学生達を、教育する塾がありました。先生は、当時の漢学者城勇雄先生を頭に、数名おられました。

ところで、邸宅の石垣のところには、松の木があって、道路の上まで大きな枝がのび、昼でも暗い程繁っていました。夜になると、女子どもなどは、この大松の下を通る者は、一人もいませんでした。ことに夜更



けになると、「鍋のふた」（化け物の俗称）が、下がる
といって、一層さみしい所とされていきました。

もちろんこの怪しい化け物は、乱暴ざかりの若い者達
であり、晩翠舎の塾生のいたずらだったのです。

ある晩のことです。塾生の数人が、夜もシンシンと更
ける頃、この松の木にのぼり、一本の蛇の目傘を、ひも
でつるし下げて、下を通る
人をおどかしていました。
ところが、大変りしくた
くましい武士が通りかゝり
松の木の下まで来ると、気
合もろとも、目にも止まら
ぬ早業で、つるされていた
傘をつかみとり、取り上げ
てしまいました。

松の木の上にいた塾生は
大変驚いて、すぐさま松の
木から飛びおりて、その武
士に向って、頼みました。

「このかきは、私のかかさまのもので、大変大事にしているものです。どうぞ、こらえて下さい。」

と、膝を折って頼みました。その武士は、傘を返して塾生達にいました。

「貴様達は、将来の高鍋を背負って、いかねばならないのだ。そういう者が、この様な始末では、心配でならん。よくよく反省して、勉強に励め。」

と、云い渡し、静かな足どりで、去っていったということです。

その後は、この怪しい化け物は現われなくなり、のどかな所になったということです。

尚、この晩翠舎の塾生に、上町の綾部金作という、名物男がおられました。いつも大きなステッキを持っていて、道を歩きながら詩吟を吟じたり、筏橋の上でしばしば、独り剣舞をするなどして、氣勢を上げておられるのが、見られました。

後に、日本の味噌を沢山もってアメリカに渡り、貧しい人達を相手に、バターの代用として、味噌を使用させましたが、金作氏のこの構想は大成功だったということ

です。

しかしながら、氏のその後については、残念ながら不明です。

七十五日長生きする

宮越 青 木 ヤ ス

ったっちゃげな。

それかり、初もん食べたり、珍しもんを食べると、七十五日、長生きするとゆうごっになったげな。

だれでん（だれでも）初もん（物）、珍しいもんを、食べる時にゃ、

“あゝ、七十五日、長生きする”

と、いうが、こん言葉ん 意味を 知っちゃるな。

それは、ある“へんどさん”（お遍路さん）の話よね。
昔々の、ことじゃった。ある罪人が、打首になつとき
そばんいた役人が、

「いよいよ最後じゃが、何か思い残すこたねか」

と、いわれたそうな。そしたら、罪人が

「ハイ、申し上げます。死ぬまでん、もう一べん“そ

ば”が喰いたい」

といったそうな。役人は、

「よしよし、もぞなげかり、くわしてやるぞ」

というて、早速そばの種を、めたつよ。芽が出ちえ、ふ
とっちえ、粉がでけたつが、七十五日じゃったげな。

最後んそばを喰うた罪人はニッコリして、冥途に旅立

地名 鳴野の由来

鳴野 黒水 渉

昔、百濟（くだら今の韓国）の禰嘉王は、その子福智王に、位をゆずったが、その三年後に、国内が大変乱れ止むなく、我が国に難をのがれ、日向の国蚊口浦に、漂着したという。

蚊口浦に上陸された一行は、安住の地を求めて、父禰嘉王は神門へ、福智王は比木に、又福智王の母君、つまり禰嘉王のお妃、支岐乃は、亡くなられた後、大年大明神として、現在の大年神社に、おまつりされた。

鳴野の地名は、この支岐乃から、とられたといわれている。

以上は、筆者が、故安田尚義先生から、直接おききたものであるが、そのよるところは、旧記の証拠が、やや乏しいともいうことだ。

大年神社の氏子は、鳴野と正祐寺であるが、昔は両地区合せて、鳴野六か村と呼んでいた様である。

老人クラブ寿会は、両地区あわせて組織され、活動し

ているのも、このような由来があるからかも知れない。

地名 御屋敷について

萩原 松 浦 今朝義

稻荷神社は、光明天皇御守創立の神社ですが、御屋敷鎮座の稻荷神社は、八代藩主秋月種徳公御守護神で、御供米、神鏡、御刀、御屋敷など、寄付されたということです。

年々の行事、お祭りは、露店数十に及び、近郷の参拝客も多く、大変なにぎわいで、盛大だったそうです。古老の話によりますと、大正時代までは、境内に老松古木がおい繁り、暦応四年以来、稻荷水路（いなりみこ）といわれ、航路の唯一の、目標だったそうです。

神社の西側は、うっそうとした森があって、萩原御寝間御殿の遺跡があり、森の中には、大きな井戸もあり、昼間でも、一人では、さみしい所でした。又、東の方には、広い空地が広がり、萩原倉庫があった。

当地の小丸川は、清流で深く、日豊線の開通までは、紀州みかんを積んだ、帆船の、荷揚げ場でもありました。人々は、傷物のみかんを、拾ってたべたということです。

時代の流れと共に、河川も変わり、神社も南の現在地となり、御寝間の屋敷跡も、わずかに二坪位残っています。地名御屋敷は、御殿屋敷をとり入れて、名付けられたという記録はないようです。

木彫・薬師如来

脇押条 磯松

現在、高鍋の円福寺に、祀られている薬師如来は、お身丈約三十五糎、材質は櫟である。

誠に立派な「み仏」であるが、薬つぼを、お持ちであった筈の、左手が欠けている。いつどうして欠けたのかは不明である。

この薬師如来は、明治三十年頃（円福寺第三十代住職の頃）高鍋町中鶴の、則松松太郎先生が、大平寺の土持墓地の藪の中から、拾い上げられ、帰宅の途中、円福寺に立寄られ、寺へあずけられたものと、伝えられる。

古い話で記録にはないが、このことは、円福寺第三十代住職、多賀学進氏の母堂、多賀八重子（八十才）が、則松先生、ご存命のころ、直接きかれた話として、筆者が聞いたものである。

覚照寺の由来

平原 福 永 ミサオ

五十数年前、養母より聞いた話です。

本寺は、高鍋町大字上江一八七六番地（東平原Ⅱ現在の西小学校の南東）にあります。

今から約四百年も、前のことでしょうか。秋月の殿様に従い、筑前より高鍋に來ました、篠原九郎兵衛が建立したものです。

ある日のこと、殿様は、家來の九郎兵衛を呼んでいわれました。それは、

“予に従つて参つた、七人の中一人は、お坊さんになり、死亡した、多くの人の菩提を 弔うように”

との、言葉だったのです。

そこで九郎兵衛は、早速お寺を、竹鳩の安蔵に建てられ、安蔵寺となされましたが、このお寺が、覚正寺のはじまりとなったのだそうです。

ところがその頃、殿様の狩場が近くにあったのですが、お寺の鐘の音が、響きわたり、狩の邪魔になるので、寺

の場所を、変えよとのことでした。又、丁度そのころ、小丸川の洪水で、川が氾らんし、災害があったので、現在の所に、移転するとともに、寺も改めて、覚照寺として、第十一代住職も、了善と改められました。

爾來、住職も、現在第十二代光昭にいらっています。

※ 別記によりますと

覚照寺 在平原 真宗本願寺 本尊阿弥陀如来

本像立一尺六寸

右は、秋月中務大輔方随里、篠原新四郎の男新六が一寺を建立して、覚照寺と号し、釈了善をして、開山開基となし、本日まで継承す。とあります。

宮田・潮垂権現のこと

脇 押 条 磯 松

いつの頃から、まつられたのか、群しいことはわかりませんが、高鍋三大権現の一つ、だったといのです。

余程古い時代から、お参りする人々があつた様です。記録によりますと、明治四十一年に、宮田地区の住民によつて、宮田神社に、一しょにおまつりされたことになっています。

しかし、その後古い椎の太木の下に、小さい祠を造つてお祀りした様です。近くの人はもちろん、遠い所からも、お参りする人々が、絶えませんでした。

昭和十六年、県道の高鍋新田原線の開通の際に、祠の位置が、道路敷に差しつかえるため、祠の移転をしなければならぬことになりました。その時の町長、山内武玄・請負人らが相談して、お祈り神事を丁重に行つて、現在の所に移転して、祠をつくられました。

祠は木造で、横二米・奥行一米半あつて、建物の中に瓦様の小さい祠があり、ご神体が、納められている様で

す。屋根はこの地区の、佐藤氏の寄進で、銅板ぶきになっています。

その脇には、この移転を記念する、立派な石碑が建てられています。

近郷近在から、お参りする信仰者が多く、靈驗あらたかであると、大変評判になっています。特に病氣の平癒学力向上・入学祈願に、お参りする人が多く、入学試験の時期になると、日参する人も、多いといひます。

願をかけるには、お塩を供えて、お参りするのが、例になつてゐる様です。

筆者は、宮田の織田ハツ子さんに、案内してもらい、お参りしました。新しいきれいなお花が供えてあり、小さい銭もあがつていました。

中尾お大師さん

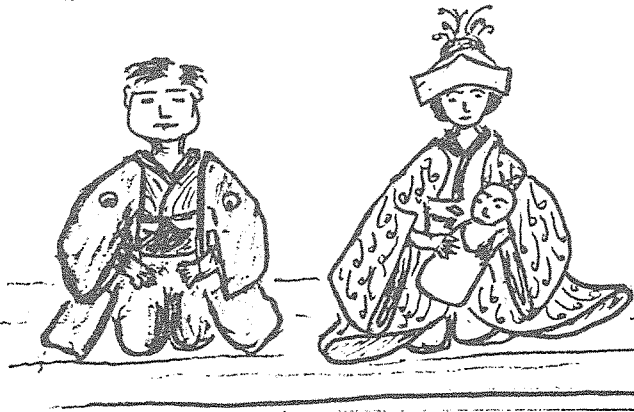
中尾 岩 切 久 恵

現在、中尾村でおまつりしている、お大師さまは、昔佐々木老夫婦が、祭っておられました、それを鈴木文吉さんがおまつりなさるようになりました。

その後、両家の後をついで、中尾の人々が、中尾の守り神として、おまつりされています。

昭和二十年前後までは、嫁女もらいの結婚式とお祝は、お婿さんの家で、行っていました。

それで花婿、花嫁さんが床の前にそろって座わり、お祝いが始まります。お酒もまわり、にぎやかになった頃、ほおかむりをして、着物の裾を、つんからげた、若



い青年が、お大師さまをかくえ込んで来て、お大師さまを、花嫁さんのひざへ、どっかと抱かせまして、"幸わせな家庭を、つくりなさい"と、村のすみずみまでお祝いに来られる、お大師様でした。それで、

娘さん祝いがある毎に、若い青年と、お大師さまは、大よろこびということでした。

現在では、結婚式場も変わり、料亭などで行なわれまので、お大師さんが、出かけていかれる事が、なくなりました。

でも、年に一度、三月二十一日には、中尾婦人会の方々が、お祭りされ、村人達の幸わせを、お願いされています。又、年毎に、新しい"よだれかけ" "ざぶとん"をもらわれ、美しい花の中、線香の匂いの漂う中で、ニコニコとしながら、村人の守り神として、鎮座されています。

上永谷 “かがや” 行事

上永谷 松岡政栄

上永谷には、昔から、引き継がれてきた“かがや”という行事があります。いつの時代から行なわれてきたのか、だれも知る人はいませんが、毎年お盆の十三日の夜に、行なわれることになっています。

先づ当日は、分館長をはじめ、地区民全員が、公民館に集合しますと、安置されている、神仏の前に集り、神仏にたいして、お盆行事の歌“かがや”を唄い、供養を済ませます。

そのあと、全員連れだって、小さい鐘をならしながらその年の、新盆の家を訪ずね、小さい鐘に合わせて“かがや”の歌をうたい、その家の新盆の供養をするのです。この行事は、ずっと昔から、親から子へ、そして子から孫へと、代々教え受け継がれてきた様です。

“かがや”の歌詞は、次の通りです。

(その一)

かがやいちぜん潮の早さに身をまかす

くめば身をやすゝ 身をやすゝ

ようこの寺に ようこの寺に 参りて見れば面白や

八つ九つ稚児の手習い ナムアミダブツ

ようこの寺に ようこの寺に 参りて見ればあら見事

七つの塔に 八つの提灯 八つの提灯ナムアミダブツ

ようこの寺の ようこの寺の つばの小草何になる

ナムアミダブツの六つの字が鳴る 六つの字が鳴る

ナムアミダブツ

親ようこすまでも ようこすまでも

花と思いしわが親を 今年の盆に

祭ろ悲しや 祭ろかなしや

よう七月の よう七月の 五日にわが親を

あととえ とえと 驚ろかされる 驚ろかされる

よう驚ろかす 驚ろかす 甲斐こそよけれ鏡山

疊らでて見せよ 親の姿を 親の姿を

よう都より よう都より わが子を失う訪ずね来て

わが子の塚は どこにこそある どこにこそある

よう隅田川 よう隅田川 渡り上りのあさじ原

わが子の塚は これにこそある これにこそある

ようこの塚を　ようこの塚を

くずし絵や　みだ如来

わが子の姿を　見ては帰らん　見ては帰らん

(その二)

一、さんさかや　えんげのふらせんげの

あゝ　あめがよの　おえいそりや

おともせできんぎて　ふりもんごおせで

二、寺に参りんぎて　だんぎんぎをきけばよの

わずかこのよんど　はかりもんこおやど

三、せくなせきやるんぐなうきよんどは

車よのえいそりや　命ながけりや

めぐりんぎ会う

蚊口浦

むかしの思い出

蚊口 井上 ツルエ

私が七、八才の頃ですから、今からもう七十年程前のことです。当時小丸川河口は、帆船船や漁船でにぎあう港でした。紀州のみかん船が入港でもすると、私達は皆連れ立って港にいき、荷下ろし中にこぼれたみかんを、ひろったり又漁船（当時はじゅう船といった漁船のなまりらしい）から魚を運び下ろす時、こぼれたいわしなどを、手かごを持って拾ったりしました。

その時分にわが家の「う国丸」が誕生しました。こずり口（小丸川と宮田川の合流点の岸辺で、現在の水門の西側）で船造りが始まり、朝早くからのみの音や槌の音が響いていましたが、目を閉じると今でもその音が響いて、なつかしさがこみあげてきます。

「ホラ、起きんか、始まった」と寝坊の私は、起こされるのが度々でした。今の騒音と違って、うるさいなと思うことは全くなく、実にさわやかで、気分をはず

ませる音でした。船は半年程で完成しました。

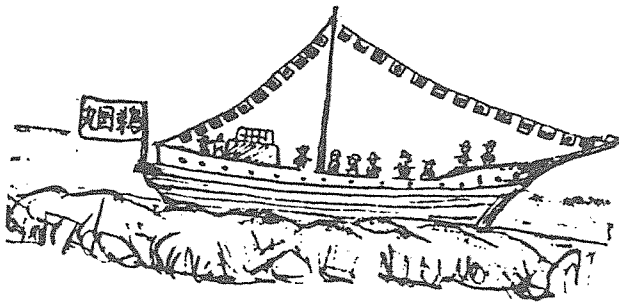
いよいよ船下ろしです。伯父が船主で、父が船長として乗り込みま

した。丸まげ

に結った伯母

は盛装です。私も、

たもとに模様のある



黒地木線の紋付に、袴といったいでたちで、意気揚々としていたのを、よくおぼえています。

新しい船「う国丸」には、万国旗がはりめぐらされ、快晴にめぐまれたその日は、万艦飾のはなやぎも、

一だんとすばらしいもので、あたりには胸の鼓動を、高鳴らせるような、雰囲気が一ぱいにみなぎっていました。

船の大きさ等は、はっきりわかりませんが、長さ六、七間、巾は四、五間ほどあったようでした。とにかく、昨今の釣船とは、全く違ったもので、長さが短かく、銅体の中程が太くてがんじょうなものでした。

まだ鉄道のない頃で、船は重要な輸送機関でした。大勢の男衆をよとい、米、木材、木炭などを積み込み、大阪、四国、瀬戸内の港によって、売りさばいたのです。木材はべん甲といって、尾鈴山系の山々より切り出された材木を、大きな角材にして筏をくみ、水量の多い時に小丸川を流し、河口付近の岸辺に山積みされていました。そこは子どもにとって、格好の遊び場となり、よく遊びに行ったものでした。

船出の後、そのつど家族や親せきなど一同で、うどさア・天神さア・いなさア・おしおさア・遠く住吉の浜にある住吉神社などに、海上航海安全の祈願に、お百度をふんで参けいしました。住吉神社へ行くには、乗合馬車で住吉まで行き、それから神社までは、トロッコに

乗っていきました。

船は一航海一か月以上かゝっていたと思います。帰港したら、仕入れてきた石炭などの、荷下ろしをしたあと仲士・舟子・お手伝いなどに、大番ふるまいをし、それは無礼講で、活気あふれる宴でした。むかしのその又昔鯨橋まで、千石船が上り下りして、蚊口千軒という時代があったと、古老の話を聞いています。蚊口に千軒もあったとは思えませんが、活気ある盛んな港町ということでしょうか。今ではおよそ、七百余戸で人口二千余人といわれています。

※ 伯父の計

ある日突然、伯父の訃報が届き、伯母は気も狂わんばかりでした。大分県の港町の船宿で、脳溢血で倒れたのでした。当時は日豊線が、県境までしか通じてなかったのです。かけつけるのが大変でした。ならぎ（現在の佐土原駅）まで乗合い馬車で行き、そこから列車に乗りかえて、鹿児島にゆき、次に鹿児島本線に乗り、門司か小倉で乗り替え大分までいくのです。その当時「どびんのつるを、ぐるっとまわって、行かにならんとじゃげな」

と聞かされていましたが、これでは土びんのつる以上に遠まわりで、地図を見る様になって、改めてその不便さに驚ろきました。

※ 鉄道の開発と港

広々と青い水をたゝえた河口は、四尋（約七米）の水ざをが届かない程の深さをもつ港だったということです。しかし鉄道の開通に伴って、鉄橋がかゝると、港はせまくなりました。

台風接近のしらせがあると、橋脚に船をつないだり、帆前船は帆柱を切断して、鉄橋をくぐって上り、“こずり口”につないで避難したのです。“う国丸”は航海中時化にあって、仙台あたりまで、漂流したこともありました。又帰り船で時化に出会うと、港を目前にしながら入港できず、細島とか、美々津に引き返したり、折生迫、油津港などに寄港して難を逃れ、船員だけ、馬車や列車で帰って来たことが、何度ありました。

現在の河口は、中洲が点々とあり、川巾はすっかりせまくなっています。鉄道が開通してからというものは、輸送機関がすっかり貨物列車に変わり、いつの間にか船

の影も珍らしくなり、帆前船も漁船も、だんだんへっていき、ついにはその姿が、見られなくなりました。と同時に、港町として栄えていた蚊口浦も次第に変わっていったのです。

※ 孤児院

父に聞いた話ですが、茶旧原孤児院が、岡山から移動する時、祖父が乗り込んでいた帆船で、孤児四、五十人を運んで来たそうです。いろんな荷物はもちろんのこと、大きな石も運んできたのです。その大きな石というのが妙に印象に残っているのです。それが何に使われたか知りませんが、柿原政一郎著“石井十次”によるとその石は、御影石だったことがわかりました。

その後もこの御影石を荷下ろしすることは、聞いておりましたし、墓碑とか、家のまわりの石垣とかに、使用されていましたが、最近は余り見かけなくなりました。

萩原の昔と今

萩原 荒川 末 広

萩原は東西六百米、南北六百米で、ほぼ正方形となっており、駅通りを中心に、北には小丸川の清流があり、遠くには尾鈴山を望み、南は雲雀山台地が眺められる。

人口三百五十余名が住み、萩原並びに稻荷町を合わせて、萩原自治公民館といい、町内の公民館組織としては大きい方に属しています。

私達が育った頃、大正十年私が十才の時分までは、戸数が、萩原二十二、三戸、稻荷町が十二、三戸でしたが現在では、百七十余戸になっています。

私の祖父から聞いた話ですが、今からおよそ百四十年前、萩原に大火事があり、萩原全部が、丸焼けになり、なっただけのことです。火事後、住民が力を合わせて、藁ぶき屋根より、瓦ぶきの屋根に切りかえ、準防火式の、住いになったということです。その後萩原では、大火事があったということは、耳にしません。

尚、その後も諸文明は、他地区に先んじて、とり入れ

られました。が、ランプから電灯になったのも、高鍋町では、早い方だったと聞いています。

日豊本線開通の、大正十年頃までは、萩原の小丸川沿いの川岸には、大阪、紀州方面より、大きな帆船が立寄り、横づけになっていたのを、今でも記憶しています。

鳴野のむかし

鳴野老人クラブ

代表 森 仲 吉 82才

今の小丸川河口から北側と、鉄橋より東、海岸線までは、広い松林で、樹令三、四百年の、松の太木が、うっそうと茂り、防潮防風の役を、果していた。又鉄橋から西側は、約三ヘクタールの塩田、二ヘクタールの田畑が広がる、広大な所であった。

塩田に、潮をひき入れるため、松林を堀り割って、海水を入れた跡が残っている。昔の人は、堀割と叫んでいたが、その溝の深さは五米、長さは四百米程あった。当時の人々が、大変な苦勞をして、造ったものに、違いない。

水田と耕地は、明治の末まで耕作され、溜池（イノコといった）があり、その池から、水を汲み上げて、稲の栽培をしていた。又畑地では、砂糖きびが栽培され、砂糖製造工場も、建設されていた。

小丸川河口は、鉄橋のほぼ中央付近の、真東に当る方角だったが、河口は大変深く、千石船が出入りし、水

神様の下まで、自由にのぼってきていた。

水神様の庭には、樹令千年を数える、松の太木が立っていた。しかし戦争中に、敵機迎撃の邪魔になる、という

ことで、切り倒されてしまった。現在もその大きな切り株が残っている。



今の川は、泥沼様になっ

ているが、当時は水深六米以上もあり、千石船が何そ

うもつながれていた。そしてその船の下では、二米もある「マルカ魚」が、何十匹となく泳いでいたのを、

昨日のことのように、記憶

している。千石船で、鳴野の者が所有していたのは、五

そう位いた。それ等の船は、この付近で作られていて、

諸物資を運搬した。漁船も大きいのが、数隻いて、日向

灘に漁にでていた。又他県の船の出入りも相当にあった。

紀州の国から、みかんを満載した、みかん船も来て、私

前に述べたように、小丸川河口は、大正の初め迄は、大森林におおわれていたが、大正十二年日豊本線が、開通してからは、小丸川の洪水がある度に、洗い流され、その様相は次第に変わり、大木は次々に流失した。更に

がいて、気持が悪い程だった。昔の人は、鍋のふたが下がる”といつて、子どもの頃は、恐い場所だった。

現在黒水渉氏所有の畑も、数百年をへた大木があつたのが、今もまぶたの裏に、焼きついていて離れない。

昔嶋野は、五か村といわれ、嶋野、正祐寺は、何事も話し合いがなされ、力を合わせて、生活してきた。当時の人口は、現在のようになかったので、家も少なく、大木が方々に立っていた。昔の地蔵様は、大きなやしろがあつて、松の木と樹令五百年もの、雑木が生い繁っていた。現在の地蔵様（岩下弘源氏）の土地には、五百年以上もたった松の大木が、十本もたっていた、大きな山だった。今の岩切商店の、地蔵様の付近も、雑木が茂って

おり、樹令數百年のものばかりで、昼も暗く、ふくろうがいて、氣持が悪い程だった。昔の人は、〃鍋のふたが下がる〃といつて、子どもの頃は、恐しい場所だった。現在黒水渉氏所有の畑も、數百年をへた大木があつたのが、今もまぶたの裏に、焼きついていて離れない。

又、時期によつては、毎晩のように、そば汁を大皿にもつてたべていた（そば汁とは、そば粉をこねたものを、はしの太き位に切り、野菜、芋類を沢山入れて煮たもの）米のご飯は、盆か正月でないとした



べなかった。米の収かくは、相当にあったのだが、米のねだんがよかったので、雑こくを常に食べ、米は売ってお金にかえた。肉類は一年に、何回しか食べなかったが魚・貝類はたくさんとれていたで、思う存分食べた。又、川や海には魚が多く、種類も豊富だった。

豆腐は、昔から食べていたが、豆腐汁となると、大ご馳走だった。明治の末から大正にかけて、学校に持っていく弁当は、麦飯がほとんどで、たまに米の飯を持っていた。おかずは梅干・らっきょう・漬物だった。

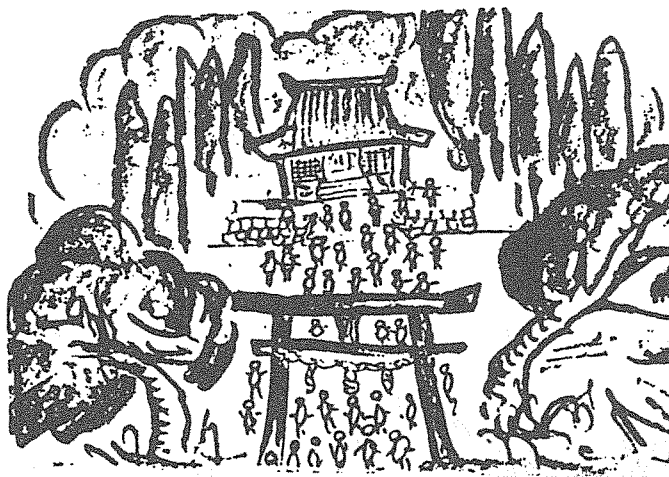
※ 駄祈禱

鳴野は、徳川時代の末頃から、明治初年頃まで、五か村といい、平和で素朴な生活をしていた。五か村とは正祐寺・大寺・川の上・中の筋・深川の五地区である。鳴野の人々は、殆んどが土着の者で、移住者がなかったためか、最大のお祭りは「駄祈禱」で盛大だった。

このお祭りは、三日間にわたって、村人が豊年を祝いながら、水神様のお祭りをするのである。子どもから老人に至るまで、総てこのお祭りに参加し、楽しくにぎや

かに、この三日間を心ゆくまでお祝いし、楽しんだのである。第一日は、水神様のお祭りを行ない、二日目は、宿先でご馳走があり、その昔から伝わる、棒おどりを奉納するのである。

最後の日には、駄祈禱祝い納めの行事などの、行事が続いた。



各村毎に宿元がきまり、各家を順番にまわって進められた。特に宿先でのご馳走は、大変なもので楽しみの一つだった。又

親類、縁者も招ねかれて、大変な人出だった。こうして村人は、豊年を祝い、神に感謝し、お互いの親交を、深めあったのである。

※ 学校

明治初年から大正に至るまで、坂本に尋常四年まで、木の瀬と上江に小学校があり、高月に高等科がおかれていた。鳴野の人々は、それ等の学校に通学し、勉強したのである。

当時の生徒は、草履、あしなか又は、はだしで学校に通っていた。服装はもも引き、しりきればんてんの、粗末なものだった。それ等の着物は、自分の家に、はたおり機があり、綿をつむいで糸にし、それをはたおり機でおって布にし、着物を仕立てゝいた。明治以後になると着物をきた上から「はかま」をつけて、学校に通っていた。

(鳴野郷土史より)

比木神社のお里まわり

川田 財津 モトエ

木城比木神社のお里まわりは、私どもが小さい頃の、楽しい思い出の一つでした。神社を出発され、木城高鍋の各地を、三日間にわたってまわられ、各地では、それぞれに、比木さんをお迎えする行事に、わきたちました。

毎年、秋もたけなわの十月二十六日、比木神社の境内で、前夜祭が行なわれ、翌二十七日川田神社へと御神幸になります。

青木や川田の青年たちが、お迎えにいき、神官さんの、笛や太鼓に合わせ、鈴をつけた、シャランシャン馬も加わり、ドン、ドン、ピーヒャラ、ドン、ヒャララと、大勢の同伴が、従っていた様子は、ほんとに、にぎやかなお神幸でした。

ご一行が、宿の坂という所に、さしかかると急に笛や太鼓など、一切のものを、止められた



そうですが、これは、この坂の脇に、比木さんの娘さんが住んでおられるので、その娘さんが賑やかさに、後追いされてはかわいそうだということで、出来るだけ静かに、気付かれない様にとの、気持だったようです。神様の親心と申しましょうか。思いやりの深い、人間味豊かな神様であつたんだと、感心させられます。

そこを通り過ぎられると、再び鳴り物入りで、村人達のお迎えする、川田神社へとご到着なさるのです。

神社の境内では、家内安全、五穀豊じょうのお神楽が舞われました。又各家庭でも、それぞれに、ご馳走がふるまわれていました。

ご神幸も、現在では、時代の流れとともに、自家用車が利用されて、何かさみしくなりません。